

## 二つのコロックについて

### On two Colloquia

岩崎 稔

IWASAKI Minoru

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

*Quadrante*, No.24 (2022), pp.141–142.

海外事情研究所では、今年もなにか WINC (Workshop in Critical Theories) との共催で書評コロックを開催してきたが、そのうちの代表的な2つについて、ここにその討議の痕跡を掲載しよう。まずひとつは、2021年9月18日に Zoom Meeting の形式で開催された「冷戦とは何であったか——「人びとのなかの冷戦世界」を読む」である。課題作品としたシンガポール国立大学の益田肇さんの『人びとのなかの冷戦世界——想像が現実となるとき』(岩波書店、2021年)は、今年度もっとも話題となった学術書のひとつと言える。実際、この会の直後には、朝日新聞社が主催する大佛次郎論壇賞の第二十一回作品に選ばれている。当日の提題者は、戸邊秀明さん(沖縄史、東京経済大学)、渡辺直紀さん(コロニアル文学研究、武蔵大学)、藤井たけしさん(韓国現代史、本学)が引き受けてくださり、益田さんご自身がリプライをしてくださった。アジア太平洋戦争をめぐる民衆の戦争責任という論点はすでに研究の蓄積があるが、冷戦という出来事についてはどちらかというとき長く国際関係論の文脈などでしか扱われてこなかった観がある。そのなかで近年ようやく「冷戦文化論」という議論が日本語圏でも始まっていたが、益田

さんの労作はそうした動向とも異なり、まさに民衆の「冷戦責任」と呼ぶべきまったく新しい議論の扉を開いた。『朝日新聞』の書評委員でもある戸邊氏のレビューはすでに『朝日新聞』本紙に掲載されている〔2021年6月26日付朝刊・書評欄〕のでそちらを参照していただきたいが、本号には、渡辺直紀さんと藤井たけしさんの批評を、お二人にそれぞれ当日の御報告をあえて加筆修正していただいたうえで以下に掲載する。さらに益田さんから、そうした批評に応答する形でのリプライをあらたに書きおろしていただいた。

もうひとつの WINC コロックは、東京理科大学の吉田裕氏の学位論文を基にした新著『持たざる者たちの文学史——帝国と群衆の近代』(月曜社、2021年)を課題とした「「かれら」とは誰か——『持たざる者たちの文学史』を読む」である。2021年11月6日にやはり Zoom Meeting の形式で実施した。提題者として、新城郁夫さん(沖縄文学研究)と阿部小涼さん(カリブ海地域研究・社会運動)のお二人がともに琉球大学から参加してくださった。ヨーロッパ思想や文学にとっての棘とも言える群衆、民、モップの表象を切り口に、第三世界の文学表現を縦横に論じた長大な作品



## 二つのコロックについて

だが、それがこれらの提題者によって、辺野古で、高江で強行されている暴力という沖縄のリアルにつねに結びつけられながら、生き活きと読み解かれて行く様は、文学史研究の批評という枠を超えた極めてスリリングな経験となった。本誌のために、新城さん、阿部さんはそれぞれ書評という形で当日の議論をまとめ直して下さり、さらにそれらに応答した吉田さんの文章も収録することができた。

これら二つのコロックにご協力くださり、さらには玉稿をくださったみなさんにあらためて御礼を申し上げたい。これらの対話が、これから二作品に本気で取り組もうとされるひとたちにとっても、きっと資するところが多いだろうと信じている。

(なお、掲載した二つのコロックはあくまで代表的なものである。本誌には収録しなかったが、平野克弥氏の『江戸遊民の擾乱 転換期日本の民衆文化と権力』(岩波書店、2021年)や内藤千珠子氏の『「アイドルの国」の性暴力』(新曜社、2021年)などをめぐる企画もいくつか実施してきた。このように、海外事情研究所は、最新の問題作をつねに所員や研究所を基盤とする学術プロジェクトとの関わりのなかで精力的に取り上げてきている。)